

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330241

研究課題名(和文)大正・昭和初期におけるリテラシー形成メディアとしての「副読本」の研究

研究課題名(英文) A Study on "Supplementary Books" as Media for the Development of Literacy from the Beginning of Taisho Period to the Beginning of Showa Period

研究代表者

府川 源一郎 (Fukawa, Genichiro)

横浜国立大学・教育人間科学部・名誉教授

研究者番号：00199176

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究の目的は、大正・昭和初期の初等国語教育と文学との関係を総合的に解明することである。そのため、公的な国語読本と、民間で刊行された各種の子ども読み物との接点に成立した「副読本」に着目した。それらの「副読本」のほぼ全貌を整理分析することで、以下のような種類があることが分かった。すなわち、学校教育の補完的な役割を担うもの、大正リベラリズムの影響を受けたもの、修身教育に傾いたものなどである。刊行形態も様々で、リーフレット様のものや堅牢な表紙を持つものがあった。調査分析の結果、大正・昭和初期の国語教育の中における「文学」の具体的な位置づけとその広がりとを具体的にとらえることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate a relationship between elementary Japanese language education and literature from the beginning of Taisho period to the beginning of Showa period. For that purpose I aimed at the "supplementary books" which came into existence as a point of contact between Japanese government books and various non-government children's books. The results of pigeonhole and analysis of almost all those books, I found out that those "supplementary books" have following 3 kinds; books which were complementally for school education. books which were influenced by Taisho liberalism. books which had a tendency to the teaching of ethics. The publication styles were various, therefore some books had stiff covers and the others were similar to leaflets. After my investigation, I could discover the role of children's literature in those books in those periods, and could understand the extension of those functions.

研究分野：教科教育

キーワード：国語教育 近代日本児童文学 副読本

1. 研究開始当初の背景

現在、新しい国語教育の方向が提示されている。それは教科書の理解活動に終始する教育から、読書活動などとも密接につながった表現中心の国語教育の主張である。そうした主張がなされるのは、文化メディアの拡大やグローバル化の展開などの今日的な要請の必然的な結果である。しかし過去の国語教育界にも、似たような動きが存在した。とりわけ大正期・昭和初期には、国定教科書が絶対的な権威として「教科書を教える」教育の中心となっていた一方で、それに抗うように民間の文化運動を学校教育の中に持ち込もうとした状況がある。つまり、子どもの表現活動に焦点が当たり、そこから新しい教育の主張と実践とが多方面にわたって展開されたのである。この時期の教育運動と文化運動との関係を精査しておくことは、これからの国語教育の方向を考えるためにも大きな手掛かりの一つになる。

また、いったん「教育」という視座を外して、文学研究や文化史研究の側からの観点から考えてみても、その総合的な展開の様相を浮かび上がらせるには、文化や文学の需要と供給との問題を考えざるを得ない。なぜなら、文学研究や文化史研究は、文芸作家の創作行為だけではなく、それが印刷出版される過程や流通の状況までを視野に入れることが必要だからだ。とりわけこの時期には、新しい文化活動の開拓者・伝達者として教員が担った役割には大きなものがあつた。いわゆる「自由主義教育運動」の根底にある演劇・文学・音楽・美術などの芸術的な世界の革新を図ったのは少数の先進的な芸術家だったとしても、それを信奉し教育運動の中で拡大していったのは新進気鋭の多くの教育実践家たちだった。

そこで、この時期の多くのリテラシー形成メディアの一つの形として、教員たちが子どもたちに直接手渡すべく作成した「副読本」がある。この印刷刊行物は、他のメディアと

の相関関係の中に誕生している。それを図示すると前図のようになる。これらを視野に置きながら「副読本」を中心に考察を進め、その実態を明らかにすることは、文学研究・文化史研究と教育研究との進展に裨益するとともに、これからの国語教育のあり方を考える上でも示唆に富む研究となる。

2. 研究の目的

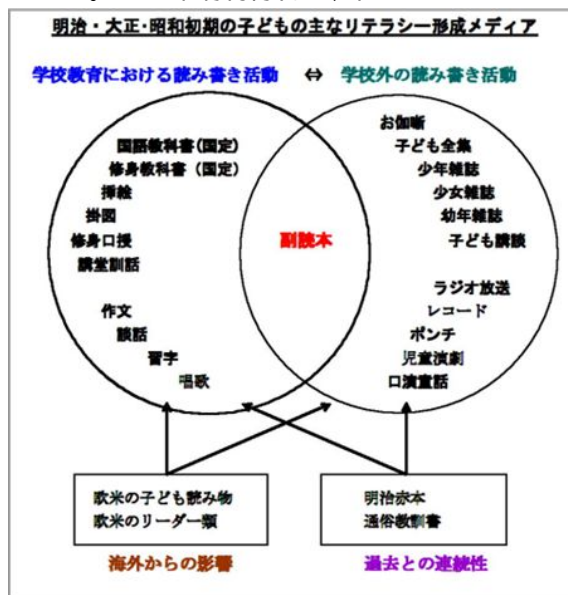
本研究の目的は、大正・昭和初期の教科書が国定化だった時期に、教科書内容と実際にそれを受容する子どもたちとの間に、どのような文化の伝達と創造の動きが行われたのかを、児童読み物との関係を通して検証することである。

この時期には国定国語読本は三回の大きな改訂がなされている。教科書はそれ自身がカリキュラムであり、教育内容そのものでもあつた。これに対して、学校外では、大正リベラリズムの波の中で、刊行された『赤い鳥』を始めとする多数の子ども読み物が刊行され、「子どもの世紀」のかけ声の下、自由画、児童演劇、童謡、舞踊などの文化運動が展開されていた。このような学校外の文化運動と、国語教育とがどのような関係を取り結んでいたのかは、きわめて重要な問題でありながら、これまでの研究では、その実態は必ずしも明らかにされてはこなかった。

本研究では、明治後期から大正期、昭和初期におけるダイナミックな言語文化運動を、できるだけ幅広く探ることにより、その時期の子どもたちがどのようにそれぞれのリテラシーを形成していったのかを探るために、具体的な材料として「副読本」に焦点を当てる。すなわち、「副読本」および類似の書物群を研究対象にすることで、国語教育研究と近代児童文学研究とを統合的に考察することをめざす。当時の「副読本」を、広汎な言語文化創成運動の交流の中に位置づけ、また近代言語文化が創り出してきた最も重要なメディア装置としてあらためて考察し直すことで、日本近代児童文学史や教科書史の書き換えが可能になるとと思われる。

3. 研究の方法

全国各地に散在している副読本、およびそれに類似した書類を網羅してリストを作成し、それぞれ個別にその内容や構成、ならびに成立の事情などを調査分析して記述していく。対象資料を数多く保管しているのは、国立国会図書館以外では、三康図書館や神奈川県立近代文学館（滑川道夫文庫）、大阪府立図書館（大阪児童文学振興財団）などであり、そのほか古書店などを十分に活用する必要がある。こうして収集した書籍や資料類を、できるだけ学校教育で行われた教授活動と民間で進展していた文化活動とのかかわりを視野において、広い視野から分析を進めていった。



4. 研究成果

(1) 2012 年度は、基本的な資料の収集に力を入れた。その過程で、当初の予想よりも、さらに多くの資料に当たる必要があることが判明した。そこで鋭意、情報を集め、一次資料の探索収集に努めた。まずは、明治末期の音声伝達活動と教育活動との関係から派生した「副読本」類に手をつけ、明治期に学校教育の中で行われた「修身口授」と密接に関連した書物に「講堂訓話」関係の書物群に着目した。

これらの書物は、各地の小学校が小規模な単級学級から大規模な学校へと展開していく中で使われた。その内容は、児童全体に向けた校長の「語り」によって上からの国家主義を伝えるもので、教員が持参して使用する書物である。一方、同じ「修身口授」という授業科目から出発していながら、必ずしも修身的な内容とはいえない『教授材料話の泉』（1904《明治37》年）やその翌年に刊行された東基吉『家庭童話母のみやげ』などの書物も現れている。これらは、いわゆる大正デモクラシーの先蹤となる文化的な仕事として評価できる。

さらに、実際に子どもたちが手にする本としては、巖谷小波が切り開いたお伽読み物路線に便乗した大衆的な子ども読み物が盛んに刊行されていることも確認した。これらの書物の整理に着手したが、かなり多くの種類の子ども読み物が発刊されており、それらは従来の研究では、全貌が報告されていない。以上、2012 年度の研究では、「副読本」の基盤を形成する出版状況のいくつかを整理し、その発展の方向への見通しをつけることができた。

(2) 2013 年度も、基本的な資料の収集とその分析記述に力を入れた。その過程で、当初の予想よりもさらに多くの資料にあたる必要があることが判明した。そこで鋭意、情報を集めて、一次資料の探索収集に努めた。そのうち、明治期の読書インフラと「副読本」との関係、日本読書学会第 57 回大会で口頭発表した。

さらに、第二期国定読本といくつかの「副読本」との関係、全国大学国語教育学会第 125 回広島大会で口頭発表した。早い時期に整備された副読本の例として『小学児童課外の読物』と『興国課外読本』とを取り上げたのだが、発表会場からは、読書教育実践への言及が必要だとの意見があり、そちらの方面へも研究の手を伸ばすべきだとの認識を得た。また 1924（大正 13）年に山梨県師範学校付属小学校が編集した『小学文芸読本』の位置づけに関して『横浜国大語研究』に論文を掲載した。具体的に論述を始めて、それを発表することで、ようやく「副読本」およびその周辺の状況が見通せるようになってきた。

(3) 2014 年度も、昨年に引き続き基本的な資料の収集とその位置づけの考察に力を入

ることとした。昨年度の反省から、「副読本」以外の資料にも目を配ることの重要性が実感されたので、「学習雑誌」に目を向けることにした。というのも、ここにも多くの子ども読み物が掲載されており、活字教育文化を総体としてとらえるためには「学習雑誌」への目配りが必要だと思われたからである。とりあえず、先行研究で触れられていない明治 20 年代初期の学習雑誌の揺籃期ともいえる時期の学習雑誌のいくつかを取り上げ、これらの雑誌と国語読本との関係を探ろうとした。

そのうちで『教育雑誌』という名称の雑誌に本邦初訳のグリム童話が 15 作品存在することを発見したので、それを論文としてまとめた。また肝心の「副読本」に関しては、大正前期に刊行された二種類の代表的な学校教育用の副読本の内容の分析とその位置づけに関して論文をまとめた。

(4) 2015 年度は、本研究の最終年度である。日本読書学会において、『学年別読み物集』の淵源とその展開」という題目の下に、以下のような趣旨の研究発表を行うことができた。すなわち「年生向け」のような読書対象を設定する読みものは、それを対象とする読者が「学校」に通っていることが前提になる。その意味で「学年別読み物集」は、近代学校制度のもとに生まれたことになる。また「歳～歳向き」のように読書対象を特定の年齢層に限定する場合にも、読みものの内容や言語表現と読者の年齢との間になんらかの関係が想定されている。つまり、子どもの「発達段階」に応じた異なったレベルの読みものが存在する、あるいは子ども読者には「発達段階」に相応しい読みものを提供すべきだという思考法である。こうした「学年別読みもの」がどのような経緯で生まれたのかを考察し、具体的な事例を挙げて分析した。

さらに、新美南吉顕彰会における講演の場で新美南吉の作品群を「童心」という観点から検討する機会もあった。これは同時に、本研究で大きな柱となる大正リベラリズム下における子ども読み物を支える中心概念の検討機会でもあった。

以上のような口頭発表を重ねる一方で、本研究の中核となる「副読本」およびその関連図書の収集・整理・分析作業を着々と行ってきた。対象とする資料が膨大な数にのぼり、なおかつ部分的にしか存在しないものもあって、詳細が不明である場合も多い。だが、それらをおおづかみに整理して、大正期・昭和前期の教育文化史の中に位置づけると同時に、個別の副読本に関してその特徴を記述する作業を進めている。研究の 4 年目に至って、ようやくその全体像と見える段階に至ったと感じている。

今後はこれまで発表した個別の成果をもとに、近代言語文化の展開と子どもたちのリテラシー形成を関連付けながら、一連のつながりとして記述していく作業が必要になる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

府川源一郎、教育現場の営みを別の文脈に位置づける 今なぜ「国語教育史研究」なのか、『国語教育史研究』査読有、第 16 号、2016 年、pp1-8

府川源一郎、子ども読み物と国語教科書の交流史 明治期の「お話」をめぐる四人の仕事、『児童文学研究』査読有、第 48 号、2016 年、pp1-22

府川源一郎、『教育雑誌』に掲載されたグリム童話 本邦初訳の十五の作品、『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』査読有、第 28 号、2015 年、pp1-10

府川源一郎、大正前期における国語副読本の検討 『小学児童課外の読物』と『興国課外読本』の場合、『横浜国大国語教育研究』査読有、第 40 号、2014 年、pp3-20

府川源一郎、山梨県師範学校附属小学校編集の『小学文芸読本』の位置 文芸的「国語副読本」の先駆的成果、『横浜国大国語教育研究』査読有、第 32 号、2014 年、pp.1-17

〔学会発表〕(計 9件)

府川源一郎、近代日本教育の出発点、横浜国立大学教育学会(招待講演) 2016 年 3 月 30 日、横浜国立大学

府川源一郎、「ごんぎつね」から「良寛」へ 「童心」のゆくえ、新美南吉顕彰会(招待講演) 2016 年 3 月 20 日、半田市雁宿ホール

府川源一郎、国語単元学習と文学、日本国語教育学会大学部会、2015 年 12 月 19 日、東京都文京区立窪町小学校

府川源一郎、「学年別読み物集」の淵源とその展開、日本読書学会第 59 回研究大会、2015 年 8 月 2 日、林野会館

府川源一郎、子ども読み物と国語教科書の交流史 明治期の「お話」をめぐる四人の仕事、日本児童文学学会(招待講演)、2014 年 10 月 18 日、京都女子大学

府川源一郎、明治期の学習雑誌と国語教育、全国大学国語教育学会第 127 回筑波大会、2014 年 11 月 9 日、筑波大学

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009929024>

府川源一郎、第二期国定国語読本と国語副読本をめぐって、全国大学国語教育学会第 125 回広島大会、2013 年 10 月 27 日、広島大学

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009810857>

府川源一郎、「国語副読本」につながる明治期の読書インフラ、日本読書学会第 57 回研究大会、2013 年 8 月 4 日、林野会館

シンポジウム「児童文学の境界」府川源一郎/目黒強/灰島かり/川勝泰介、日本児童文学学会、2012 年 10 月 27 日、千葉大学

〔図書〕(計 1件)

府川源一郎、明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究 リテラシー形成メディ

アの教育文化史、ひつじ書房、2014 年 2 月、B5 版 1220 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

府川源一郎 (FUKAWA GENICHIRO)

横浜国立大学・教育人間科学部・名誉教授

研究者番号：00199176